

冊子版

全65話から
選りすぐりの
6話を掲載

建設業で本当にあった 心温まる物語Ⅲ ～キラリと光る建設の技～

編・著 降旗 達生

約100社の建設業従事者、建設業と関わりのあった方より収集した『心温まる物語』を、65編に厳選、書籍化したしました。



建設業で本当にあった
心温まる物語Ⅲ

～ キラリと光る建設の技 ～

編・著 降旗 達生

特定非営利活動法人 建設経営者倶楽部 KKC

子どもたちに建設業への夢を与える

中高大学生に建設業の実績、すばらしさを伝えるための副読本として、建設会社が新卒生を募集する際の採用ツールとしてご活用いただいています。

特定非営利活動法人建設経営者倶楽部KKC

色の魔術師「塗装工」

私が塗装会社に入社して、まだ間もないころの話です。

お寺の塗装工事を請け負い、先輩たちと現場に行くこととなりました。私は、それまで養生や片付け等の雑用しかやらせてもらえなかったので、今度こそ塗料を塗らせてもらえるだろうと言う期待を持って、現場に乗り込みました。

すると現場初日に先輩から、

「おまえもそろそろ塗装について勉強しないと。今日から別の作業をやつてもらおうから」
と言ってもらえました。

やっとペンキ屋らしい仕事が出来るぞ、と思っていたら、先輩から与えられた仕事は、壁、柱の下地処理（塗装をする面を平らにする作業）でした。

来る日も、来る日も、壁や柱にパテ（下地のくぼみ、割れ、穴などの欠陥を埋めるために用いられる肉盛り用の塗料）を盛って、紙やすりで削る作

業。しかも、先輩のチェックがあり、同じ箇所を二回も三回も行います。

体がパテを削った粉で真っ白になることと、紙やすりを擦り続けることで起こる指先の痛みで、心が折れそうになりました。

「雑用の延長かよ」

と思いつながら作業を続けました。

結局、最後まで塗料塗りの作業はさせてもらえず工事は終わってしまいました。

「こんな作業を次からの現場でもやらされるのなら、会社をやめてしまおう」と言う気持ちが出てきました。

施主の住職さんの完了検査の日、私も先輩に連れられて検査立会をおこなっていました。住職さんは、塗装の仕上がりを見てとても喜び、こんなことを言ってくれました。

「たいへん綺麗に仕上げただいてありがとうございます。下地を丁寧に処理してくれましたね」

えっ、素人の方でもそう言うことってわかるんだ、と思って聞いていると、

先輩が、

「ええ、塗装の仕上がりは、下地処理で決まりますからね」と誇らしげに言ってくれていました。

私はその言葉を聞いて、先輩たちは私に雑用ではなく、大事な作業を任せられていたんだということがわかり、また、下地処理は塗装の基礎だ、ということもわかりました。

続いて先輩は、

「この下地処理をおこなったのはこいつなんです」と私を紹介してくれました。

住職さんは、

「お若いのに大したもんですね。近い将来は腕利きの塗装職人ですね」と言ってくれました。

その言葉で私の気持ちの全てが救われました。

当時の先輩たちの物言わぬ教えと、知識ある御施主さんの励ましの言葉で、塗装工としての今の私があります。

高層ビルや橋の工事は「鳶職」の独断場

ある病院の工事現場でのことです。

私は、入院している子どもたちが大型ダンプやクレーンが動いているのを、病室の窓から眺めていることに気づきました。私たちも、この子どもたちが病室から外に出られず病氣と闘っているのを見て、早く元気になってほしいと願っていました。

そこで、現場の鳶（とび）さんがこの子どもたちにあるサプライズを思いつきました。

当日まで子供たちに気づかれないうようにと工事現場以外の場所で準備をし、みんなの力で作ったサプライズは、夜に大きなトレーラーで運ばれてきました。

事前に病院関係者だけに

「十二月二十四日の夜七時に合わせて、部屋の窓から外を見てください」とお知らせし、そして子供たちにカウントダウンをお願いしました。

三、二、一、
ゼロ。

窓の外がいつせいに明るくなりました。

それは大型クレーンで吊り上げた巨大なクリスマスツリーだったので。

サプライズは大成功。子どもたちの喜ぶ姿に、病院関係者や私たちも幸せな気持ちになりました。

このようなアイデアを考えられるのも建設業の特権です。少し発想を変えると「夢」さえ造り出せるのだと思います。



建物を強くして人の命を守る 「鉄筋工」

私大型シヨツピングセンターの現場で、配管工事の監督をしていました。当時の現場には千人以上の作業員が従事しており、色々な職種の人たちと仲良くなりました。現場というと男社会ではありましたが、女性も活躍しており、鉄筋レイスはピンクの作業着をまとい、脚光（きやつこう）を浴びていました。

大型現場なだけに事故もよく起こっており、安全についてのルールが何度も改定されてきました。私が管理する配管工事では、大きな事故はなく、厳しい工程を守っていました。何業種もが一か所に集中した区画工事をしている時、私たちは、あの鉄筋レイスが壁の鉄筋組立作業をしている足場の下で配管工事をしていました。すると、

「キヤー」

という叫び声が聞こえました。

鉄筋レイスの一人が鉄筋を落としてしまったのです。配管工事をして

いたのは真下ではかったのですが、鉄筋は足場に当たって跳ねて私たちの方に落ち、配管作業員さんの左足に当たってしまいました。

一心不乱に病院へとかつぎ込み、さいわいにして、処置が早く重症にはならず済みました。後日、作業員さんがお礼に来ました。痛みがなくなっただけ、表情がゆるんでいたのか、

「良かったですね」

と言うと

「はい、本当にありがとうございます」

とにこやかに言うもので、私は首をかしげました。

「おかげ様で付き合う事になりました」

「えっ？」

「鉄筋レイズスのあの子と付き合うことになりました。今後は彼女を背負っていきます」

一年半後、結婚式の招待状が届きました。

小さな力で大きな機械を操る「オペレーター」

みなさんは父や母が働く姿を見たことがありますか？ または、お子さんに自分が働く姿をみせたことがありますか？

私の父はダンプカーの運転手をしていました。私が小学生のころ、学校が休みの日に何度かそのダンプカーに乗せてもらい、父の働く姿をみた事があります。そのせいか、私は父の仕事に憧れた時もありました。

私が小学三年生の時、社会科の授業で、

「好きな仕事」

「嫌いな仕事」

を発表することがありました。「好きな仕事」の中には、社長さん、パイロット、野球選手、先生……など発表されていきました。

そして、「嫌いな仕事」の発表になり、ゴミ回収、バキュームカーの運転手、そしてダンプカーの運転手と発表され、私は予想もしなかったできごとに参加し、自分の発表ができなくなってしまうました。

私は先生を憎みました。なんでこんな授業をするんだ。

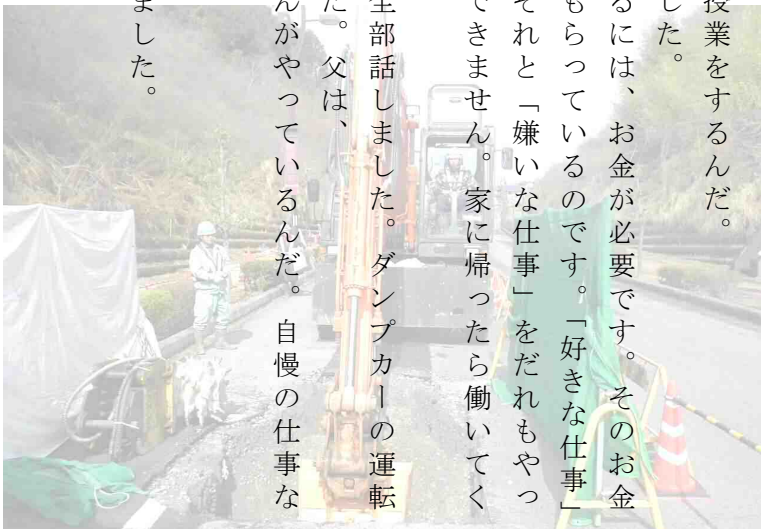
授業の最後になり、先生はこう言いました。

「皆さんの給食費や、洋服を買ったりするには、お金が必要です。そのお金はこうやって皆さんのお父さんが働いてもらっているのです。「好きな仕事」「嫌いな仕事」どちらも同じなんです。それと「嫌いな仕事」をだれもやってくれなかったら、今のような暮らしはできません。家に帰ったら働いてくれているお父さんに感謝しましょう」

私は家に帰り、父にこの授業のことを全部話しました。ダンプカーの運転手が「嫌いな仕事」というのも話しました。父は、「そうだよ。みんなが嫌いだからお父さんがやっているんだ。自慢の仕事なんだ」

と笑っていました。

それから、父の仕事は私の自慢になりました。



「ビル、マンション」は生きる基盤だ

ある職人さんの話です。その職人さんは、当時建築ラッシュだった駅前のオフィスビルで、来る日も来る日も工事をしていました。休日も、その仕事のたいへんさから疲れてしまい、家族をどこかに連れて行ったりすることもできません。それでも、自分の仕事で街が活性化する、人が幸せになる、と思いつ、懸命に仕事を続けました。

その職人さんは、自分が携（たずさ）わった建物はいろんな人が協力し合、い、でき上がるものだと思っていたのと、また、それは自分の作品でもあり、子供のように愛情のあるものだとも話していました。

ただ、建物に対し子どものように愛情を注ぐ一方で、自分の家族に愛情をうまく表現できない自分自身にいら立ちを感じていました。

それから十数年。

娘も大きくなり、就職活動をしているときに、その職人さんは聞きました。

「就職活動はどうだ？」

娘は

「○○に決まったよ、お父さん」

と答えました。あまり娘と向き合えなかったその職人さんは、わが娘を感慨深く見つめていると、娘は続けてこう言いました。

「○○って会社のオフィスビル、お父さんが工事して建てたんでしょ？ 会社の会社と迷ったけど、やっぱりお父さんが建てた建物の中で働くのって守られてる気がしてね……」

照れくさそうに話す娘に、職人さんは、ただただうなずいて言葉を返せなかったと言っていました。少し誇らしげにも見えました。



「道路」は国土の毛細血管だ

私は以前、京都府にある職場に四年ほど勤務していました。職場までは小一時間かかりましたが、街、川、海それぞれの四季を感じることができた道りでした。

しかし、日本海に面したこの道路は、冬には北西の強風から来る波浪にさらされるために頻繁に補強工事がおこなわれていました。

その工事現場では、職人さんが忙しくしている中、いつも定位置に「旗振りの人」がいました。

旗振りの仕事は、誰にでもできそうで脇役的な仕事として捉えられがちである一方、常に屋外で車が来るか来ないかに気を配らなければなりません。夏は太陽が照りつけ、冬には雪が降るなか、工事の邪魔にならないよう安全に車を誘導するために「旗を振る」という過酷な仕事でした。

交通整理などで旗振りをしているおじさんに止められる時は、いつも申し

訳なきさそうにお辞儀をしながら車を止めてくれました。私もそれにならって車を止めた後にお辞儀をするようになりました。

そんなある日、私の車が止まるとおじさんは空を指差しジェスチャーで良い天気ですねと伝えてきました。笑顔で返答すると、おじさんも笑顔で答えてくれました。

また、雪が降るような寒空では体を震わすジェスチャーをされ、私がこぶしを作ってがんばってと応援すると、おじさんも拳を固めて小さくガッツポーズ。そんな他愛もない挨拶が続いていたある日、工事も終了して、おじさんとの交流も終わってしまいました。

その後、私は工事現場や駐車場の誘導員をみると、あのおじさんかなと思いい、顔を見るようになりました。

ある日、地元の工事現場で変わらず旗を振っているおじさんに出会いました。すると、一緒にいた母がそのおじさんを見て、

「あの人は旗振りの仕事をする前に何回も仕事を変わってたけど、この仕事は二十年以上も続いているね。暑い日も寒い日もいつも笑顔でいていいねにやっ

てはるわ。天職やったんやろな」と言っていました。

私は母の言葉から、どこにいても変わらないで二十年以上も笑顔で仕事をするおじさんに、旗振りとしてのプライドを見るとともに尊敬の念を抱きました。

私が目の合ったおじさんに小さくガッツポーズをすると、おじさんも私のことがわかったのか、笑顔でガッツポーズ。おじさんは旗振りのプロです。



編・著者略歴

降旗 達生(ふるはた たつお)

NPO法人建設経営者倶楽部KKC理事長/ハタコンサルタント株式会社代表取締役

小学生の時に映画「黒部の太陽」を観て、困難に負けずにトンネルを掘り進む男たちの姿に憧れる。1983年大阪大学工学部土木工学科卒業後、株式会社熊谷組にてダム工事、トンネル工事、橋梁工事など大型工事に参画。

阪神淡路大震災にて故郷兵庫県神戸市の惨状を目の当たりにして開眼。技術コンサルタント業を始める。建設技術者研修4万人、現場指導1000件を超え、建設業界からの信頼が厚い。「がんばれ建設～建設業業績アップの秘訣～」は読者数12,000人、日本一の建設業向けメールマガジンとなっている。

著書に「その仕事のやり方だと、予算と時間がいくらあっても足りませんよ。」(クロスメディア・パブリッシング)、「その一言で現場が目覚める」(日経BP社)、「受注に成功する！土木・建築の技術提案」(オーム社)、「技術者の品格其の一、其の二」(ハタ教育出版)など。

人間が行う仕事の約半分が機械に奪われるという予測をしている専門家もいます。そんな時代に生き抜いていくためには、手に職をつけることが大切です。ロボットに置き換えられないような技を身につけることで今後何十年と力強く、やりがい、働きがいを持って働き続けることができます。

建設技術や技能は何十年経ってもロボットに置き換えられない仕事の一つです。その理由は次の3つです。

- 1 一品生産で同じものが二つとない仕事であること
- 2 自然を相手にした仕事であること
- 3 人命に直結する仕事であること

日本人は「国産で手作り」にもっとも安全、安心を感じます。逆に「外国製の工場生産」に不安を感じます。建設物は人命に直結することだからこそ、安全、安心が強く求められ、機械に置き換えられることはありません。

これから十年、そして三十年、四十年とやりがいを持って生きるために、キラリと光る建設の技があなたにとって、そして日本にとってかけがえのない財産になることでしょう。

(おわりにより抜粋)

書籍版『建設業で本当にあった心温まる物語Ⅲ～キラリと光る建設の技～』

編・著 降旗 達生
制作 特定非営利活動法人建設経営者倶楽部KKC
発行 ハタ教育出版
定価 500円(税別) 74ページ

「書籍版」は下記ホームページからお買い求めいただけます。

◇NPO法人建設経営者倶楽部KKC URL:<http://kk-c.net/>

◇ハタ コンサルタント株式会社 URL:<http://www.hata-web.com/>

お問合せは**0120-926-810**まで